



勇気をもたらしたオリンピック・パラリンピックとコロナ禍との狭間で

学校長 高島 典子

いよいよ学校が始まりました。この夏休みは、これまでに経験したことの無い特別な夏休みとなりました。まだまだ終息の見えないコロナ禍ですが、報道等にありますが、感染力の強い変異株が急速に広まっており、陽性者数が著しく増加しています。学校関係者の新規感染者数も夏休み期間に急増し、学校教育活動の継続も危ぶまれる今日、より一層の感染予防対策が必要となりました。分散登校に短縮授業、緊急受け入れ等と、様々な確認が必要ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

学校では、登下校を含み学校生活ではマスクを必ず着用し、大きな声での会話を慎むこと、黙食を守ること、下校時は寄り道をせずまっすぐ帰ること、放課後の遊びや外出についてもできるだけ自粛するよう指導いたします。また、オンライン授業実施に向け、少しずつステップを踏んでいきます。ご家庭におきましても、更なる健康管理と健康観察(検温等)及び、マスク・手洗い・うがいの励行、他者との接触をできるだけ減らす等をお子様とご確認、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

さて、様々な困難の連続の中で東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。皆さんの心には何か伝わるものがありましたでしょうか。

私の心に一番強く印象に残っているのは、ソフトボールの金メダルです。エースの上野由岐子さんの13年間の道のりについては感慨深く、最終的にはどれだけ強い信念をもって戦いられるか!という「ファイティングスピリット」について感銘を受けました。悩み苦しみながらも13年間努力を重ね、重圧と葛藤の末、金メダルを獲得した心の強さに感服し励まされました。2008年の北京オリンピックの時も、一人で413球投げ、日本に金メダルをもたらした上野由岐子投手は、テレビでのインタビューで「みんなが守ってくれていることを信じていたから、勝利を確信していた。」と仲間への信頼をすがすがしい言葉で語っていました。北京オリンピックの後、ソフトボールがオリンピック種目から消え、今回のオリンピックで復活。でもまた種目から消えるという激動の中、39歳までモチベーションを保ってトレーニングをし続けた前向きな姿勢に尊敬の念を禁じえません。その上野由岐子投手がテレビで小学生の時に出会った本「私の一冊」について次のように語っていました。

「小さな夢の詩集 第6集 『絶望より立つ』」須永 博士 作詩

その表紙には次のような文が載っているそうです。

「人に負けてもいい しかし やるべきことを やらない 自分の弱さには 絶対負けたくない」

上野由岐子さんは小学校時代に出会ったこの詩を自分の原点と言い、いつも繰り返し自分に言い聞かせてきたそうです。この詩が「何度もやめようと思った。何度も苦しいと思った。」上野由岐子さんを支えたのですね。

アメリカ合衆国との最終戦。5回までは上野投手が無失点で抑え、6回は後輩の後藤希友(みう)投手。最終回到再び上野投手が登板し三者凡退に抑えて2-0で勝利。サード山本選手がはじいた球をショートの上野選手がキャッチしダブルプレーにしたのも大きかったです。そして往年のライバル、モニカ・アボット(投手)は北京オリンピック後に来日して日本の実業団に入り、6回を投げた後藤希友投手を育てる一翼も担ったそうです。多くのドラマとスポーツマンシップに心より敬服いたします。私たちも精一杯頑張らしましょう。